

# Prof. A. Hillの 細胞生物学的日常

## Episode

### 9

 **月** 日、中庸、ではなく中腰が人間にとって如何に重要なことをつくづく思う。つまり、久しぶりにぎっくり腰になったのである。もう10年くらい前から、何回も繰り返しているのだが、ここ1年以上何ともなかったのですっかり忘れていた。腰と天災は忘れた頃にやってくる。これまでに、横になった状態で1日中全く起き上がれなくなってきたこと1回(家でよかった)、道ばたでうずくまつたまま1時間以上動けなくなったこと1回(下校する高校生らの通り道でじろじろ見られた…)、車の座席から出ること能わずやはり1時間以上じっとしていたこと1回(どんなに工夫しても座席から立てなかつた)、それらに比べれば今回ははるかに軽度であるが、立ったり座つたりがとても恐ろしい。ある特定の角度を通過するとき、ガビーンと痛みが走り(表現古い?)、下手したらまた動けなくなるのではという恐怖に脂汗が滲む。その位置から先にも進めず元にも戻れずしばしフリーズしたままとなりそれから手でどこかにつかまりながら恐る恐る姿勢を変える。へっぴり腰でじわじわ姿勢を変えていく様は、他人から見たら滑稽であろうがそんなこと気にしていられない。すいぶん昔、教授が腰を痛められ、教授室の床に腹ばいになって論文を読まれているのを見て、学問に対する遡る熱情に感じ入るより先に笑ってしまった若さ故の怖いもの無しの愚かな自分が脳裏に蘇る。天罰覲面である。立っていて、ものを床に落としたら終わり。とても取る気がせず、床が遙かかなたに思える。明らかな中腰以外でも、歩行していく緩い坂とかで微妙に姿勢が変わったときにズキーンとくる。人間普段如何に意識せず様々な姿勢を取っていることか。毎朝洗濯物を干すのが我が家において私に与えられた最も重要な使命で、青い空のした「ふりむけばカエル(by矢野顕子)」を歌いながら洗濯物を干すのが結構好きでもあるのだが、これが今は辛い。スローモーションのような動きで、しばしば、うわーパンツ落としたあああ、とひとり騒いでいる。不思議なのは(医学的に見たら不思議でも何でもないだろうが)、ある非常に限られた特定の姿勢の時のみ痛みが走るがそれ以外では全く痛まないことで、横になっていると全くなんともないので朝目覚めて、あーもう治った



んだと思い、いつものように一気に起き上がるとして悶絶する羽目になる。しかしそのうち本当に治まってしまうと、腰の存在などまたすっかり忘れるのだ。喉元過ぎれば熱さ忘れる、虫歯の時に歯の存在を、痔の時にお尻の存在をあたかも初めて知ったかのように思うのと同じだ。人間は、自分自身の肉体でさえこのよう体ならだから、他人様の痛みなどわかるはずもない。腰痛持ちには今腰が痛い人の気持ちが少しは分かるが、それも自分が痛んでいないときは抽象的なものになってしまう。人の痛みを知るという大事なことが実に困難なことなのだ…ましてや人の気持ちになってみることなどどれだけ至難の業か。などと腰が痛いお陰で深遠なことを考えていると、ラボの大学院生(親が私と同じ年。ムムム)が腰痛で病院に行ってきたというではないか。おー、今なら私も心底彼女に同情できる、と思いつきや、何故か笑みが零れてしまうのであった。あれーあれー、なんでかなあ。なんで嬉しいのかなあ。でも嬉しいなあ。人の不幸を我が幸とするのは実に簡単だ。



教授室の窓から

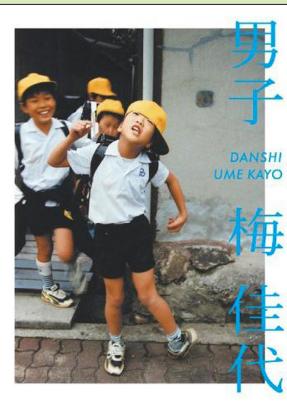
\* \* 付記1：ふりむけばカエルの作詞は、糸井重里。

\* \* 付記2：Another side of investigatorに今回登場いただいた仲野先生に、私も本屋が好きだが何故か本屋に行くとトイレに行きたくなる(それも大のほう)という秘密を打ち明けたところ、先生はさして驚かれず「あれは新しいインクの匂いのせいに違いない。」という私には思いもよらなかつた科学的

洞察を述べられた。先生への尊敬の念を深めると同時に、もしかしたら同じような秘密を持つ人は結構居るのかも、と意を強くした。同士の会を作ろうかしら。

\* \* **付記3**：鋭い人は付記2でお気づきかもしれないが（鋭くなくてもかな…）、私は尾籠な話しが好きで、この連載中よくぞこの因果な性癖を封印し通したと自画自賛している。家でも食事時にそういう話をしたがるので、息子にさえ下品であると叱責される身だ。ウ○コ・オ○ッコネタ好みは、エロネタセクハラ攻撃オヤジよりさらに下等と言えよう（というか幼児？）。

\* \* **付記4**：今時の子供はあまり下品なことを言わんのだろうなと思っていたら、いかにも言いそうな小学生達が被写体の写真集を発見した（梅佳代「男子」）。こいつらしいなあ。昔ながらの男子のお馬鹿DNAは連綿と保存されているのだな。みんな生き生きしているし、今の世の中も捨てたモノじゃないかもしれません。



## Episode 10 番外特別編

月日、特定領域という言葉から指定、や、広域、などの言葉が思い浮かんでしまう。なにゆえそのような連想が生じるかというと、それは当然某有名広域代表、じゃなくて、領域代表に起因する。その代表は、全くもってアサヒ芸能や実話時代の巻頭グラビアを飾るに足る、ある種の業界のトップに相応しい風格を持っている。これは単に私の勝手な主觀ではなく、客観的な実証が複数回存在しているので、\*が3つ付く十分なstatistical significanceがある。Data1:若かりし頃の日曜の午後、近所だからいいやとガウン姿のまま車に乗ってビールの自販機まで行こうとした彼は、狭い道で対向車（黒塗りの大きなセダン）に出くわした。ささいな行き違いから運転していた中年グラサン男（彼には向こうがその筋に見えた）が激昂し降りてきた。びびった彼が、自分は悪くは無いのだが降りて謝ろうとしたところ、その姿を見た相手は血相を変えて車に戻ってバックで逃げ出した…This result indicates彼のガウン姿に如何に迫力があるかということと、見かけに比べ実は気が弱い（良く言えば纖細）こと。Data2:ある会合の後彼と私は一服しようと、東京駅の上にある某老舗ホテルのバーに向かった。途中大きな宴会場の前を通りかかったのだが、何となく様子が普通ではない。パーティーらしく黒服の人がたくさんいるのはまあ当たり前だが、妙に黒服がしっくり

くる人々で、髪の毛短いし、何より目つきが…これは桜田門関係かその敵役かどっちかだろうと漸く気がついたときには、怖いお兄さん達のまっただ中。「纖細な」私がえらいこっちゃと青ざめていると、モーゼの十戒のごとく我々の行く手の人の波が割れ通り道が出来るではないか。しかも両側からご苦労様っす！の声と共に傾斜角一定のお辞儀が次々と繰り出され、こちらっす、と彼らの宴会場内に案内されそうになった。私は何が起こったのか直ぐには理解できなかったが、彼らの目線は私の隣に…This result confirms やっぱり大幹部の貴祿十分ということ。尻尾の傷も武闘派を思わせるしなあ。



浪速大学の春

強面な風貌とは裏腹に領域代表は実はとても心優しい。成果が出ないからと言って班員をコンクリート詰めにして東京湾に沈めたりしないし。なによりも家族想いで（任侠系でもドンは家族想いだ）、昔単身で海外留学中に、ご家族が短期間の滞在後帰国する時、飛行場に見送った帰り車を運転しながら号泣したという逸話は、さしものひねくれ者の私をも素直に感動させたのであった。嫁がれる娘さんのことを心配する様子もまた然りで、誠に真っ直ぐな人なのです。思えばこの先生とは珍道中を繰り広げてきた。京都では何故かふたりでカラオケに行き、ペアで食べるラブラブ鍋（？）を注文したら若い女性店員に思わずぶつと吹き出されてしまった。部屋では、代表は壁に向かって新曲の練習に余念が無かった。日帰り温泉に行ったときは、ひとりきりのサウナで左右の胸筋を交互にぴくぴくさせて遊んでいるところを目撃してしまった…班会議の夜、数人で宿を抜け出して街に飲みに行き帰ろうとしたらタクシーがお終いで徒步で帰らざるを得ず、折しも吹雪となり浴衣に草履の代表は遭難寸前、あそこで彼が凍死していたら領域は途中で無くなっていたやも知れぬ。代表が情けない不慮の死を遂げることもなく無事領域は期間を全うしたが、この人間味溢れる親分に惚れてしまった私は未永くつきあいたいものだとしみじみ思うのである（ホモつけはありません）。しかし、こんなこと書いたから絶交かも…

